

六 花



2011 平成23年

俳句雑誌りつか

5月号

Cover designed by Little Bird

刀田山・鶴林寺（播磨の法隆寺）

黄鐘わうじきの韻いん短かり麦の秋

国宝のあれもこれもや松の芯

薰風や靴ぬいで入る太子堂

黄鐘の律りち籠もりけり白牡丹

松の芯屋根の四方なる四天王

三尺の濠渡したる蜘蛛の糸

滴りのしたたりて草打ちやまず

流れぬる松葉に添ふる水馬あめんぼう

一本の白根走れり蝮の道

亀の押す睡蓮の葉の鉄色に

石塔の影は十三鳥の子

灯籠の火屋ほやより現れし夏の蝶

葉桜や埋木新たな仁王像

新緑や門を透とほせる蘇鉄濃し

松まつ陰かげに二本三本夏わらび

境内の砂利の色とぶ薄暑かな

しやくり鳴く雛どりに実を結ぶ梅

緑蔭の腰掛けたくも石尖り

車お前ほ草この花も負けじよ松の芯

避雷針の空群青に楠若葉

一本となりたる夫めを婦と松の花

梅檀の若葉の蔭を浴しをり

美しき蛾を啄まむわれ燕なら

新樹光瞼にあふれをりにけり

本尊に足向けてをり三尺寝

濡緑の木目深かり蟻の列

薫風や高天井の雨の染しみ

沓脱に靴と日傘をそろへあり

三重の塔低からず夏燕

夏の蝶血潮紅葉を潜りくる

大お玉杓子の尻尾見えてをり

菓子くづを蟻にこぼしてやりにけり

夏座敷戸の手当たりには爪の痕

玉葱の葉の青々と折れてをり

巢つばめや十二神将怒髪なる

よく噛まむ花菜弁当ほろ苦き

蒲公英の絮飛ばさむとしてゐたる

近畿地方に数多くある聖徳太子開基伝承をもつ寺院の一つで、太子建立七大寺の一つとも言うが、創建の詳しい事情は不明である。平安時代建築の太子堂（国宝）をはじめ、多くの文化財を抱えるため、西の法隆寺とも言われている播磨地方有数の古寺。（ウイキペディア）鐘楼には黄鐘（黄鐘調）の鐘があり希望すれば撞いてもらえる。

春障子開けば影の別れけり

藤生 昇三

はるしようじひらけばかげのわかれけり ふじおしようぞう

返したる鱗光れり柳鮠やなぎ ぼえ

露の臺ところどころに雪の塊

やはらかにゆびを指しけり梅の花

鶯の鳴くやおどろの薄みどり

とを言っただけなの……。当たり前のこと
 が、外に欠点や補って余りがあるほどの
 意は障子が光る。障子を開けば当然にその
 影は止まることがいかに困難なことである
 かい。止めることがいかに困難なことである
 しか。見ることは、頭で分らないながら大変
 難し。鱗光は、頭で分らないながら大変
 目から鱗光が落ちるような発見ということ
 に。なる。例えれば「菜の花や月は東に日は
 西に」蕪村の「よななもので、大いなる
 平凡な「非」だ。また「春障子」
 であることも見逃せない理由。冬の「障
 子」を取らば影が目をかす、寒さの方に開
 かば「ぬが、今は原句のままです

せつじゆしゆう
雪樹集

百合鷗

永田万年青

道場の板の眩しき初稽古
俎板の上に割りたる鏡餅
一ひと樹つぎに川鶉と鷺の巣ごもれる
百合鷗もだへては羽繕へり
残り鴨水探りつつ走りけり

新米

志方章子

薫青く匂うてきたる注連飾
揺れぬたる冬日の中の胡蝶蘭
機関車のごとき音たて新米噴く
小寒や手を振りながら菜を洗ふ
風花は光りの中に輝ける

蛍雪譚 六甲

ひと走りほどの距離置き孕猫 笹村 政子

ひと走り程の距離とはいつでも逃げられるような体勢をとった距離。身ごもっていればこそ、普段の距離よりも少し間合いを取っているのだろう。それをひと走りほどの距離と表現したのがうまい。同時作「源泉の匂ひに酔へり冬の蜂」「露の臺朽葉押さへて摘みにけり」も佳い。冬の蜂は当然弱々しい動きをするが、源泉の放つ臭いに酔っているのではないかという見方が面白い。「招き客ひとり」に雪を搔きにけり」は客のために（客が来なければ搔かない）雪かきをするという心の込め方を詠んだが、すでに政子さんには「客を待つ二度目の水を打ちにけり」の秀句があるので自己類想の句である。私もよく自己類想の作品を作って指摘されることしばしばである。お互いに気をつけよう。

六花集

反し たる 鱗 光 くれ かり 柳 鮠
春障子 開けたる 影の 分かれけり
露の 臺と ころど ころに 雪の 塊り
やはら かに ゆびを 指し けり 梅の
鶯の 鳴く や おどろ の 薄み どり 花

あけぼの や 濠から 発ちて 歸る 鳥
健やか かに 畦の 土筆と 伸びを せり
散る 花や 水面は なほ も 盛り にとり
壬生の 寺の 武士の 碑に 花こぼり
甘き 香を 運びて 東風の 通り けり

ビュッフエの 絵さながら 冬木道を ゆく
地方紙に くる まれ 売らる 猫柳
冬の 湖荒る かな たに 伊吹山
沓脱に 転がる 梅の 蕾か 山
亡夫の 机に 日脚 伸びに けり

平居
濤子

加納
淳子

藤生
昇三